少年時代の想い出

ハワード・ノルマン

日本ですごした少年時代に、私たち——二つ上の姉グレースと四つ下の弟ハーバートと私——をとりまく自然が美しいものだったことを、私はありがたく思っている。長野市にあったわが家からは、四方に山々が眺められた。背後にはゲジゲジ山があり、また頂上に石切場があるのでそう名づけられたゴロゴロがあった。巨きな丸石を掘り出して山腹を下までころがすのであるが、まるで雷のような音をたてておりてくるので、その小山にそんな名前がついていたのであった。遙か後の方には戸隠が高く聳えていた。ずっと手前の西側には旭山があった。高い山ではないのだが、すぐ近くにあるので高く見えていた。ハーバートと私は一度ならずその頂きに登ったものだが、当時は道しるべがよく整っていた。平野をへだてた向うには山脈が連なっていた。麓の丘は雪がすぐなくなるが、高い峰々の雪は春おそくまで残っていて、日没の光が照している光景を私は憶えている。家には小さな庭があって、柿の木が生えていた。また山桜が一本あって、子供の木登りには申し分なかった。私たちはこの山桜を船と呼んでいた。というのも、乗っても大丈夫なほど枝が強くて、先の方へ行くと心地よく揺れるからであった。

しかし、私たちをとりわけ喜ばしたのは軽井沢だった。私たちは三人とも夏季に軽井沢で生れている。すぐ近くに離山があって、わけもなく登れた。村のメイン・ストリートは、東京から来る昔の街道にあたる碓氷峠へ通じていた。峠から低い山々の頭越しに見る眺めはすばらしかった。しかし、較べるものもない山といったら、海抜八千フィートの火山、浅間山であった。これは、それこそ本ものの山登りであったし、爆発を起している かもわからなかった。私たちの遊び仲間にヘイル家の子供たちがいた。その父親は浅間の頂上に近づいたとき爆発で死んだということだった。私たちの父は、或る日、ハーバートと私を浅間登山につれていってくれたが、それは大人たちが好んでするように夜中に登るのではなかった。

ハーバートと私は山登りも好きだったが、それより軽井沢でのおもな楽しみはテニス・コートの方にあった。年かさになるにつれて、私たちは天気が良ければほとんど毎日、午前も午後もコートに出ていた。ハーバートは二年か三年、決勝戦で毎回エドウィン・ライシャワーを負かして、年少組の選手権を得ていた。年少組で試合のできる最後の年に、エドウィンは一度だけ勝たせてくれるように頼んだが、ハーバートは容赦せず、接戦の末またも負かしてしまった。幾年もたってからのちに、エドウィンはアメリカの駐日大使になった。アメリカが東京に送ったなかで最高の大使であった。夏のあいだ、社会主義者の国会議員安部磯雄が私たちの近くに住んでいた。その子息の民雄は私たちにテニス・コートでコーチをしてくれたが、この人はのちに日本デビス・カップ選手団の一員になった。

私たちは長野で幸せな少年時代をすごした。母は、午前中、私たちに学課を教えてくれた。彼女は本当にすぐれた先生だった。

一九一六年に両親が賜暇帰国すると、私は母の郷里であるオンタリオ州ミッチルで、同年の生徒とともに第七学年に入ることができた。ハーバートは、ほんの幼いときに読み方を習い覚えたにちがいない。バンヤンの「天路歴程」の児童版を読み、いつも手から放さなかった。家に外国人の訪問客があると、ハーバートは、その本を読んだかどうかをたずねるのが習いであった。

私たち兄弟は子供部屋のとなりの小さい一室で眠った。起きるのは大てい両親より早かったが、冬は父が子供部屋に火を焚きつけてくれるまで、寝床のなかで暖かくして待っていた。

私たち三人の子供は、みんな自分がカナダ人であることを知り、それを誇りに思っていた。家族のあいだではいつも英語で話した。もっとも、台所へ入って女中さんに話しかける場合は、日本語に切り換えた。私たちは近所に住む子供たちと楽しく遊んだ。なかでも特別の友達はミツオとナミオで、かれらは私たちが毎日曜日に出席する教会の日本メソジスト派の牧師の息子たちであった。私たちはやがて讃美歌集のなかの「カナ」を覚え、何を歌っているかもわからないままに、楽しい歌声を震わせていた。母はハーバートが説教の行なわれるあいだ中、じっとしていないのを鎮めるためにキャラメルをもっていくのが常であった。

食堂にかかっている大きな色彩画は、私たちの国がどこかを思い起させてくれた。一枚の絵は、サー・アイザック・ブロック将軍がヨーク（今日のトロント）に進入する光景、もう一枚はジャック・カルティエがセント・ローレンス河を遡航する光景をあらわしていた。或る日、アメリカ人の友人たちが私たちと昼食をとっていた。シャイブリー夫人という人が、カナダはつまらない国だとかいってグレースをからかい始めた。グレースは反論しようとしたが、いじめる側の相手にはかなわなかった。彼女は黙った。そして椅子から降り、シャイブリー夫人の坐っているところまで廻っていって、小さな拳をふりあげて言った——「カナダは私の国よ。」それから彼女はワッと泣き出してしまった。グレースはそのとき五才だった。母は私たちによくこの話をしてくれたものである。両親はこれを愉快な笑い話と考えていたのである。私たちの両親は農場で大家族の一員として育ち、大変幸せであった。私たちはカナダを約束の地と考えていた。（カナダに住む）祖母や叔母、叔父たちは、私たちにとって